

平成27年度

外部評価委員会報告書

平成28年1月29日(金)

香川高等専門学校

目 次

1. 平成 27 年度香川高等専門学校外部評価委員会議事次第
2. 香川高等専門学校外部評価委員会委員名簿
3. 香川高等専門学校外部評価委員会規程
4. 平成 27 年度香川高等専門学校外部評価委員会資料一覧
5. 平成 27 年度香川高等専門学校外部評価委員会議事録

平成27年度

香川高等専門学校外部評価委員会 議事次第

日時：平成28年1月29日(金)14:00～16:00

場所：香川高等専門学校高松キャンパス

(第一会議室)

- ・ 開会
- ・ 校長挨拶と趣旨説明
- ・ 委員紹介
- ・ 委員長選出
- ・ 議題
 1. 香川高等専門学校を取り巻く現状と改革
 2. 香川高等専門学校将来構想
 3. 香川高等専門学校自己点検評価
- ・ 意見交換
- ・ 閉会

香川高等専門学校 外部評価委員会 委員名簿

(平成 28 年 1 月 29 日現在)

株式会社香川銀行取締役会長	遠山 誠司
香川県教育委員会教育次長	土岐 敦史
香川県商工会議所連合会専務理事	山田 哲也
香川県中学校長会会長	福崎 彰彦
香川高等専門学校産業技術振興会会長	平田 喜一郎
公益財団法人かがわ産業支援財団理事長	中山 貢
香川大学工学部長	中西 俊介
四国電力株式会社常務取締役	末澤 等
七宝会会長	金子 知好
高松工業会会長	住田 博幸
高松市副市長	加藤 昭彦
三豊市長	横山 忠始

(所属の五十音順 敬称略)

香川高等専門学校外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、香川高等専門学校内部組織規則第 22 条第 2 項の規定に基づき、香川高等専門学校外部評価委員会（以下「委員会」という。）について定めるものとする。

(審議事項)

第 2 条 委員会は、香川高等専門学校の点検評価を踏まえ、今後の教育・研究並びに学校運営の一層の発展・充実に資するため、第 3 条に定める外部評価委員による次の各号に掲げる事項を評価する。

- 一 教育理念、目的、目標及び方針に関すること。
- 二 教育活動に関すること。
- 三 学生支援に関すること。
- 四 研究及び地域連携に関すること。
- 五 国際交流に関すること。
- 六 管理運営及び施設整備に関すること。
- 七 その他委員会が必要と認める事項

(組織及び任期)

第 3 条 委員会は、校長が評価項目に関し、十分な評価能力を有すると認められる学外の評価委員をもつて組織する。

- 2 委員は、校長が委嘱する。
- 3 委員の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 4 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

(代理者の出席)

第 5 条 第 3 条の委員は、やむを得ない理由により委員会に出席できないときは、当該評価委員があらかじめ指名した代理者を、委員会に出席させることができる。

(評価実施方法)

第 6 条 委員会は、資料による調査、本校で実施するヒヤリング及び実施調査等で評価を実施する。

(事務)

第7条 外部評価の実施に関する事務は、総務課研究協力係において処理する。

(その他)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、校長が定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

平成27年度 香川高等専門学校外部評価委員会 資料一覧

- ・議事次第
- ・資料一覧
- ・委員名簿
- ・座席表
- ・香川高等専門学校外部評価委員会規程

議題資料①

香川高等専門学校を取り巻く現状と改革

議題資料②

香川高等専門学校将来構想

議題資料③

香川高等専門学校自己点検評価

参考資料

『平成27年度 学校要覧』

『香川高等専門学校 年報2014』

平成27年度

香川高等専門学校外部評価委員会議事録

平成28年1月29日(金) 14:00~16:00
独立行政法人国立高等専門学校機構
香川高等専門学校高松キャンパス第一会議室

○(委員長) 会議の進行ですが、議題としては3件、「香川高等専門学校を取り巻く現状と改革」、「香川高等専門学校将来構想」、「香川高等専門学校自己点検評価」となっています。議題に沿って進めさせていただきます。まずは、第1の議題「香川高等専門学校を取り巻く現状と改革」からご説明をお願いします。

○(木原副校長) 資料に基づき説明

○(委員長) ただいまの、現状と改革についてのご説明について、何かご質問、ご意見等がありましたら、お願いします。

○(委員) 人口減への対応ということで、最近高専から地元企業へ見学会等に来ていただいていることはお聞きしております。これは非常に大事なことだと思います。ご承知の通り、香川県、また全国の地方共通だと思いますが、若者がどんどん中央の大学に進学し、そこで就職、結婚して帰ってこない。さらに、今後少子化が進み、ますます地元で若者がいなくなる。人口減といいますが、子どもを産み育てる若者が出て行ってしまえば、当然これは起きるわけでございまして、なるべくしてなったと思います。地元企業としましては、すでに本当に深刻な状況になっております。ブルーカラーワーカーの方々は海外から研修生などとして中小企業、零細企業が取り入れておりますけれども、エンジニア、要するに企業における中堅、中核になるような人材は、中小企業の場合は地元の若者を育てていかなければなりませんので、その若者が採れなくなれば地元企業の将来はどうなるのか。企業をどんどん人口の多いところへ移さざるを得ない。そういう危機感を持っております。

若者の絶対数は減りますし、どんどん中央へ出てしまう。特に、最近就職率が上がってきて人材不足が顕著になり、ますます中小企業には来なくなるということでございます。従いまして、どうするかというと、学生の地元企業への就職の推進、私は、これしかないと思いますので、積極的にお願いするという立場で今後考えていきたいと思っております。学校

側もこれを継続的に続けていただきたいと思います。

- （委員長） ただいまのご意見に高専側のほうからご回答はありますでしょうか。
- （木原副校長） 貴重なご指摘ありがとうございます。現在、「香川県大学等魅力づくり補助金」を活用して活動しており、補助金が終了した後の継続が非常に重要ですので、来年度に向けてじっくり考えていきたいと思えます。
- （委員長） ブロック化についてご説明いただきましたが、その目的とするところは、予算削減への対応、効率化ということでしょうか。
- （八尾校長） 現在目に見える動きは、経費節減等についての協働的な取り組みということでございます。教育を複数の高専で遠隔配信等を行うことによって人員的な削減ができるのではないかと。課外活動、管理運営についても、協働して経費の節減ができるのではないかと、さらに協働して産学連携、研究開発等を進め、より効率良くできるのではないかと。というところで進んでいるところです。
- （委員長） ブロック化はいつからですか。
- （八尾校長） 平成26年の12月頃から話が出てまいりまして、今年度の4月からブロックが正式に発足して、1年ほど経っております。
- （委員長） 分かりました。他に何か、ご質問、ご意見がございましたら。
- （委員） 改組について説明をお願いします。まず、物質化学コースというのを選ばれた理由。もう1点は、ソフトウェア技術者についてです。詫間でサブコースを設けられていることは非常にいいと思えますが、高松でもソフトウェアにもう少し特化したエンジニアが出てきたら良いということの日頃から感じております。
- （八尾校長） お答えする順番が逆になりますが、ソフト技術者が日本で非常に不足しており、日本のソフト力が国力に響いてくるような状況でございます。そういう意味で、ソフト技術者を育成するということは重要と考えております。また、情報といいますがソフトとハードはかなり違い、ソフトに非常に長けてはいるけれども、ハードについてはあまり興味がないという人もたくさんいるわけでございます。今までの高専教育では、詫間の情報工学科でも、高松の電気情報工学科等でもソフトとハードの両方を学ぶということが必要で、それは非常に重要なことですが、やはり、人の能力の特質というものを生かすためハードを完全に外して、ソフトだけで人材を育成するというコースを作ることが非常に重要ではないかと考え、ソフトのサブコースを設置するというにしましたわけでございます。ご指摘、ご提案いただきましたように、高松でも要望及び学内の意見を集約しな

がら、必要であればすぐにでも設置していきたいと思っるところでございます。

最初のご質問にございました、化学コースをなぜ作るのか、というお話でございますが、昔から、工学というのは「土機電化」と言われておりまして、土木、機械、電気、化学というのが基盤となっております。現在、非常に技術が発展してまいりまして、一つの専門だけではなかなか技術をカバーしきれないという時代でございます。学校として、「土機電化」の化学を設置することにより、工学に関係するあらゆる技術に対応して人材育成をしていくことを図ったものでございます。

○（委員長） 他に何かございますか。

○（委員） ブロック化で非常勤講師の削減というのは理解できますが、大人数講義を導入したときに、これまでのやり方の改良ができるのかどうか、大人数というのはどうなんだろうかと思うところがありますが、いかがでしょうか。

○（八尾校長） 大人数講義はある意味人件費の削減という面もでございます。実際に今年度の4月から大人数講義を試験的に実施しており、問題点や長所を洗い出しながら改革を進めております。現在、数学、化学、物理学等で行っております。結果として、その到達度試験等について問題、特に点数が悪くなるということは起こっておりません。初年度でもあり、大人数講義をするときに先生方も非常に緊張感を持って力を入れた講義をしていることもございます。大人数にすることにより、先生方の授業の持ち時間が、その分単純には減っていますが、その時間を理解の進まない学生の特別の講義等にあてる等、学生の理解に応じた柔軟な対応をとっております。単純にその人数を2倍にしたから、教える時間が2分の1になったというわけではないということです。利点等も出てまいりました。学生の進度に応じたクラスを別に設けることもできる余裕がでてきたというのも利点でございますので、来年度もさらにそれを進展させていきたいと思っるところでございます。実施にあたりましては、常にその問題点等を注意深く見ながら進めていきたいと思っしております。

○（委員長） 一概に悪い方向ばかりでなく、達成度に従ったクラス分けにつながっているということもあるということをお聞きできました。

○（委員） 大人数は何人ですか。

○（八尾校長） 今年度、実施した数学、物理学は2クラス合同ということで80人。化学は4クラス合同で160人です。さきほど申し上げましたように、学生の進捗度に応じて別クラスを設けて講義、授業をするということも併せて実施しております。

- （委員長） 物理のほうはいかがでしょうか。
- （校長） 物理も同様に、その進捗度に応じて理解の進まない学生については別の時間を使い授業を実施しております。
- （委員長） 人数、規模は。
- （八尾校長） 希望者が対象です。先生方が来るように勧め、80人のうちの2～30人であると聞いております。
- （委員） 今のことに関連してですが、大人数講義を行うことでの理解度、学力の定着度は当然評価をされていると思いますが、どのようなものかをお聞かせ願いたいと思います。といいますのは、小中学校も従来の一斉授業から、学力がなかなか定着しないということで、少人数の学び合いというのが、今、どんどんなされています。一方的な講義、一斉授業だとどうしても定着度が低い。生徒同士でいろいろ揉み合いながら学習させたほうが定着度は高いということが分かってきました。大人数講義とは逆に一学級の中を4人くらいのグループにして話し合いをさせるほうが定着度は高い。費用対効果のこともあると思いますが、学力の定着度はどのようなものかをお聞かせ願いたいと思います。
- （八尾校長） 達成度テスト等の試験を行っておりますが、昨年度と今年度を比べてみると平均点的には少し上がったというところです。大人数で教えるだけではなく、理解度に応じて、もう一度補習をやっております。大人数にすることによって、その時間的余裕ができたということがあり、大人数で教えっぱなしということではないので、その効果が出てきたのかな、と思っております。あと、教える内容により、やはり高度な学習になりますと、グループにしても思いつくようなことではなく、やはり教えないと仕方がないということもございます。学生自ら発見できない内容もいっぱいありますので、講義形式が多いのはご理解いただきたいと思うところでございます。
- （委員） 大人数講義の目的と狙いは、いずれは教職員の数を減らすということですか。
- （八尾校長） そういうことにつながると思います。
- （委員） そうしますと、さきほどの補習というのは、できなくなりますね。
- （八尾校長） いいえ。同じ教員が補習をしておりまして、例えばクラスを二つ一緒にしますと、教員としては教える時間が2分の1になるわけでございます。それで、2分の1になった残りの2分の1は何もしないのかというと、その時間を使って理解度に応じて補習をするということなので、教える時間がそんなに減るというわけではないということになります。

○（委員） 教育の質の低下になるとすれば、それは大変な問題だと思いますので、お聞きしました。

○（委員長） 大人数講義を行い、理解度の悪い学生は別のところでサポートするというようなことをされているということですね。

○（木原副校長） わたくしどもは全ての講義に対して大人数にするということではございません。大人数に向いている講義と向いてない講義があると思います。さきほど中学校長会会長から、小中学校で「学び合い」を少人数でされるというアドバイスがございました。わたくしどもも、「アクティブ・ラーニング」というものを積極的に導入しております。高専機構全体での研修会もございます。それらを、いわゆる実験系の授業にも取り入れるなど、その目的に応じて活用しているということでございます。

○（委員） ブロック化について、中四国で1ブロックということですが、これは将来、学校の数を減らそうという方向に向かう心配はないですか。

○（八尾校長） 現時点では、機構は、そういうことは一切しないと明言しております。学校数の変わらない中で協働・共有を進めるということになっております。

○（委員長） 現在のところは、ブロック化というのは、機能強化が図りやすい、知恵を持っているところを共有化して、具現化して良い教育に向けようということだとは思いますが、将来は分からないということではあると思います。

○（委員） 40名を80名、80名を160名。学生たちの受け止め方はどうですか。普通に考えると、小さなクラスが大きくなって体育館みたいなところで授業を行って、そういう補習的なものがあるとは言いながら、少し教師との距離感が開いていって、高専の教育が変化している光と影の部分があると思います。そのあたりの懸念、受け止める学生側は大丈夫ですか。

○（八尾校長） 学生に授業アンケートをとっておりますが、もちろん、「良い」という意見、「良くない」という意見、「あまり関心がない」という意見が出てきますけれども、「良くない」というのは、そんなに多くはない、20%もなかったと、10%あるかないかだったと思います。「良い」のほうは、20%を超えていたのではないかと思います。授業を非常によく理解している学生は、ほとんど影響がないととらえていると思います。何回も申し上げますけれども、やりっぱなしではなくて、必ずバックアップ、ケアをしておりますので、理解の進んでいない学生にとっても、丁寧に教えてもらうことができたということになっていると思います。やはり大人数講義の初年度であり、高専としても非常に大きな試みで

ございますので、教員も緊張して、授業準備等、入念にされて教えられていると思います。この緊張感を持続することが非常に重要だと考えており、常に学生の理解に目を光らせながら、今まで教えていたのとは違う、学生の管理にしても違うやり方ということを常に念頭に置きながら注意深く進めていきたいと思っております。

○（委員長） 続きまして、議題の2、「香川高等専門学校の将来構想」について、八尾校長からご説明をお願いいたします。

○（八尾校長） 資料に基づき説明

○（委員長） ただいまの、将来構想に付いてのご説明について、何かご質問があれば。

○（委員） 学力入試に関して、学生に志望コースを第1から第7志望まで記入させ、コース別に選択しコース配属を決定する。とありますが、例えば、第1志望で高松キャンパスのコースを選択した者が、第2志望は詫間キャンパスを選択ということも可能なのでしょうか。

○（八尾校長） 可能でございます。

○（委員） 寮に入る場合、コースによってどちらのキャンパスになるか、入試の結果が出るまで分からないと。

○（八尾校長） そうです。

○（委員） 例えば、親御さんが、うちの子は高松のコースを第1志望で受けたいが、合格が詫間キャンパスのコースだったら、詫間のほうに行かないといけないのか、ということもあり得ますね。

○（八尾校長） それを考えると、志望を書いておられると思いますので、十分学生の志望を聞いて、志望通りに合格を出すということでございます。

○（委員） 受験生としてもそれを十分に考えて。

○（八尾校長） そうですね。

○（委員） 2、3年時の転学の自由度を高めるとありますが、この場合も、1年次は高松キャンパスで学習したけれども、自分はやっぱり、電子システムコースに行きたいとなった場合には、2年次から詫間キャンパスへ変わり得ると。

○（八尾校長） 十分可能でございます。

○（十河教務主事） 補足をさせていただきます。現状、キャンパスを超えて転学科を認めておりますので、毎年1～2名程度キャンパスをまたいで転科をする学生が出ております。

○（委員） 情報コースの中にソフト系技術に特化するという箇所がございます。私は、ソフト系の技術者というのは、特に通信の勉強をしている、電気の勉強をしているなどはあまり関係がない、物事を論理的に考え柔軟な発想力を持っているということ、その二つの特質があれば学校で習った専門というのはそれほど関係がないような気がします。やはり物事をきちんと論理的に考えて判断して結論を出すということを重点的に教育ご指導お願いしたいと思います。

○（八尾校長） アドバイス、どうもありがとうございます。私も、非常にプログラミングが好きで上手いけれども、電気回路になると全然興味を示さない、全く違う分野、例えば化学をやっているけれども、計算機やソフトに非常に興味を示すなど、様々な学生がいたと聞いております。私自身、今までの体制では、そういう非常に特質のある人材を生かすきれなかったのではないかという強い思いがございますので、このソフトに特化したサブコースというのは本当にソフトに特化して、電気を知らなくても卒業できるようにしようという、非常に覚悟を持って構築しているところでございます。現在、国としてもソフト技術者不足が非常に深刻になっていきますので、力を入れたいと考えているところでございます。

○（委員） 今のソフトの話ですけれども、ソフトの分野は非常に範囲が広いので、例えばゲームソフトとかスマホのアプリのソフトであれば、本当に何にもハードを知らなくても当然作れますし、発想だけの世界です。しかし、いわゆる組み込みソフトで本当に実際にマイコンを動かすと、その入・出力に、何か接続されているということになりますので、その電気回路、いわゆるハードが分かっていないとできないところがあります。ものの動きを知らなくても組めるソフトと、ハードがある程度分かってないと組めないソフトがあるということです。十分お分かりだとは思いますが、そこをよろしく願います。

○（八尾校長） 具体的にはソフト系に特化するサブコースというのは、授業の取り方に自由度を持たせるということで対応しようとしておりまして、全くハードを知らなくても卒業単位は足りるけれども、それだけを取らないといけないことはない。学生の興味に対応し、今ご指摘のようにハードも知りながらソフトも高度な技術を習得したいということ

にも対応して、学生の自由に選べる範囲を広くしたいと考えているところでございます。

○（委員長） 副専攻制について説明されていますが、もう少し詳しく教えていただければと思います。

○（八尾校長） もちろん、主専攻、主なるコースというものはあるわけでございます。主なるコース、それぞれのコースに配分された授業があるわけでございます。その授業を全部取らないと、その中の必修を取っていかないと卒業できないというのではなく、その副専攻、これはもちろん学生に選択してもらっていいわけですが、その授業も単位に数えていくことで、卒業を満たせるようにする仕組みを考えております。

○（委員長） 今までの学科制のところだと、学科の必修のみで卒業が決まるというところを、このコースだと昔で言う学科、他学科のところのものを取っても必修にできるというような。

○（八尾校長） 数には制限がございしますが、措置するというところでございます。

○（委員長） それでは、続きまして議題の3番目、「香川高等専門学校自己点検評価」についてご説明をお願いします。

○（木原副校長） 資料に基づき説明

○（委員長） ただいまの自己点検評価についてのご説明について、何かご質問、ご意見等のある方。機関別認証評価に向けて自己点検評価をやられたということだと思えます。いかがでしょうか。

○（委員） 説明資料「教育のセンターに関する事項」で、数学科教員を専門学科の担当制にする、という改善策が出されておりますが、これは非常によろしい制度かと思えます。

○（委員長） きめ細やかな教育につながっていると思えます。これまではこういう試みはなかったのでしょうか。

○（木原副校長） 各学科から、この時期にはこういう項目を教えて欲しいという要望はしたが、要望が様々でございましたので、今回の試みの様に大きく変えるということにはございませんでした。

○（委員長） 女性教員が増えないということで、やはり高専も男女共同参画的な状況で増やさないといけないというような要請があるのでしょうか。

- （木原副校長） 女性教員が何割という目標はあります。
- （八尾校長） 目標は 30%に設定されていますので、まず女性限定で公募をしております。ただ、女性が少ない分野も多いものですから、応募がない場合もございます。ない場合は、もう一度公募を女性優先でやり直しております。女性限定で応募者がございましたら、面接をして適性等を判断しております。
- （委員長） 目標が 30%というのは、結構高いですね。
- （八尾校長） 生物系、化学系等、女性教員の多い学科のある高専は、女性教員の比率が高くなる。実際そういうところもございます。
- （委員長） 将来構想で、化学分野を創設されるということですから、化学系は女性教員の比率、応募者が多いとは思いますが。
- （八尾校長） それも思っておりますけれども、とにかく女性限定公募から出発して教員を公募するということでございます。
- （委員長） 女子学生の比率はどのようなものでしょうか。
- （八尾校長） 約 1割ということでございます。
- （委員長） 結構いるんですね。
- （八尾校長） 様々な女子学生勧誘をしております。中学生一人ひとり学校案内を配っていますが、学校案内の色を変えて、表紙の色が今まで青色だったのを、もうちょっと明るいピンク系にしております。応募者は増えてきていると感じますが、まだまだ、努力は続けております。
- （委員長） そういう地道な努力は必要と思います。
- （委員） ブロック共同・共有化という話がありましたが、女性教員の比率が少ないなら、ブロックの中で人事交流するということは難しいのでしょうか。
- （八尾校長） 人事交流は高専間で結構行われています。
- （委員） 女性の比率が多い高専から少ない高専に移動することまではしていないのですか。
- （八尾校長） 専門分野の違いがあります。もちろん制度としては十分可能ですが、お互いに希望者がいないといけませんので。
- （委員） 専門分野の違いがあるということですか。第 4 ブロックは 13 校あるのでそれが可能かと思いました。
- （八尾校長） 女性教員も女子学生も非常に多い高専もございますが、そこは生物系や

経済系ということで、分野によって差があるというところでございます。

○（委員長） 授業アンケートを実施されていると思いますが、それを授業改善に結び付けるフィードバックの方法は、具体的にはどうされているか教えてください。

○（十河教務主事） 昨年度までは、授業アンケートは年に1回しか取っておりませんでした。

○（委員長） 前期のみ、後期のみなどですか。

○（十河教務主事） 年に1回授業アンケートを取り、改善報告書を提出させて次年度に生かしておりました。しかし、それでは学生が同じ学年のうちに授業改善を体験できないので、今年度から、前期に1回アンケートを取り、授業改善報告書を提出させ、学生の要望に応じて授業改善を行う。そして後期の期末試験以降に同じ科目でもう一度アンケートを取り、改善効果が見られたか学生に確認して教員にフィードバックをする。それでもまだ改善しなければ、次年度に生かすという方針で、同じ年度で学生が授業改善の結果を体験できるシステムにしました。

○（委員長） 同じ授業で2回ですか。

○（十河教務主事） 同じ授業です。

○（委員長） 同じ授業の前期末と後期末、それは通年ものの授業ですか。

○（十河教務主事） 通年ものだけです。そういうシステムに今年度から変えました。

○（委員長） 授業改善は、個別の教員の対応に任されているところがあるかと思いますが、組織的に確認されているかお聞きしたい。

○（八尾校長） 教務主事が授業評価の点数を見て、基準以下の教員に対しては、改善報告書を提出させます。学生の点数一覧、学生の教員に対する要望書、教員の回答書で一組になっており、私はそれを全部見て教員の状況について把握し、問題があるときには注意をするようにしておりますが、システムとはしていません。

○（委員長） そういうふうに校長先生自らなされているというのは、ある種、システムだとは思いますが、お一人で見るのは大変かと思えます。

○（八尾校長） 全部見るのは、校長の仕事だということでやっております。

○（委員長） 高専の実情についてお聞きしました。

○（委員長） それでは、これで、議題についての説明と、質疑、ご意見等を終わらせていただきます。

これからは、議題に限らず、香川高専への質問、ご指摘などがございましたら、ご自由に発言していただければと思います。

○（委員） 香川高専の卒業生は大変優秀で引く手もあまただと思えますが、卒業生が初めに就職するところは香川県内、東京圏、関西圏で何%か分かりますか。

○（木原副校長） 香川県下の定義は、JR四国やタダノも含めて香川県下というのでしょうか。

○（委員） 香川県下としてください。

○（木原副校長） 高松キャンパスでは、約3割程度が香川県下です。いちばん多いのが関西地区で4割程度です。高松から高速バス利用、2時間で兵庫県に行けます。しかも兵庫県には三菱電機系など非常に学生好みの、あるいは保護者好みの企業が多い。残りが中部、東京へ行く。中四国も、瀬戸内海の反対側の水島のJFEに行くなどが多い。半数弱が進学ですので、高松の場合は4学科160名のうち80名が進学、残り80名が就職で、人数はかなり減って少なくなるのが現状でございます。

○（鱒目CSセンター長） 詫間キャンパスの現状ですが、進学率としては同程度で、5割5分が就職、4割5分が進学です。県内、県外の割合も、高松キャンパスと同程度で3割が県内、県外が7割程度でしたが、今年の5年生に関しては県内企業に就職した学生が非常に多く、約5割まで県内を増やすことができました。県外に出る学生に関しては、関西には、あまり通信系、電気系の本社がありませんので、伝統的にも関東まで出ていく学生が非常に多いです。

○（委員） 2点ほどお願いしたいと思います。1点目は、若者定着という視点です。香川県も高松市も人口構成を見ると、若者世代がほとんどいないという状況です。高等教育機関がないので、どうしても県外に出て行って、そういった方々が帰ってこないということがあると思います。何としても若い方に住んでいただきたいということで、そのためには、まずは高等教育機関が魅力ある機関になっていただきたいということが一つございます。様々な取り組みがなされているということでございますが、今お話にありましたように就職される方はできるだけ地元の企業、自治体に就職をお願いできないかと思っております。進路指導で、できるだけ県内の企業、自治体への就職を勧めさせていただくとありがたいと思います。できましたら、地元優先に指導していただけたらありがたいというのが1点でございます。もう1点は、地域との連携ということでございます。今後、さらに連携

事業を拡充していきたいと思っております。以上2点、お願いでございます。

○（委員長） 定着率の向上を、県、市から要請されているところです。香川大学が中心になって行っている「地（知）の拠点大学による地方創世推進事業（COC+（プラス）」事業で、地元定着を高めて、地域活性化になるような教育コンソーシアムを作る予定です。

○（三崎学科長） 約50%が進学ということですが、進学した学生たちも結構な割合で県内に帰って来ているようです。中程度の企業の就職担当の方から、様々な大学から応募があるが、元をたどれば香川高専の学生ということを知ります。3年生、4年生でキャリアトレーニングをするときに、学生がいちばん最初に説明を受けた企業は非常に印象に残るものですから、将来を考えて、香川県内の企業を招待して企業説明会をやっておけば、いざ就職ということになればその企業を思い出して就職先を決める可能性が非常に高くなるのではないかと思います。

○（委員長） そういうところはあると思います。実は、学生は県内にどんな企業があるのかあまり知らない。早いうちに、結構面白いところがたくさんあることを認知させるのは重要だと思います。

○（委員） 香川高専の入学者は、香川県下の中学生が多いと思いますが、さきほど申しましたように、香川の若者が減ってまいりますと、ますます子どもの数が減って、高専への入学者もどんどん減ってくる。これが非常に問題になると思います。従いまして、地域を活性化する唯一の方法は、若者がどれだけ地域に住むかということしかない。そのためには、企業がもっと積極的に、地元にはこんな企業がある、こういう面白い企業がありますと、そういうことを知っていただく機会を作る必要があることを、最近非常に強く感じております。ご理解ご協力をお願いしたいと思います。

○（八尾校長） 今ご指摘の通りでございますので、我々もご指導いただきながら進めていきたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。

○（委員） つい先日、高専の偏差値がどうなっているか調べてみました。香川高専は61点で、以前よりちょっと下がっています。61点が高いか低いかは別にして、だいたい平均的に見ると真ん中くらいですので、香川高専も引き続き頑張って、偏差値の高い学校を継続できるようによろしくお願いいたします。

○（八尾校長） ますます人気が出るように頑張っていきたいと思っております。

○（委員長） 偏差値というのは入学時の偏差値でしょうか。卒業時の偏差値は分かりませんよね。本当は、そっちのほうが重要な気がします。

それでは、みなさんのご意見も出尽くしたようですので、以上を持ちまして、香川高等
専門学校外部評価委員会の議題を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

香川高等専門学校 外部評価委員会 出席者名簿

(氏名の五十音順 敬称略)

香川県中学校長会副会長

伊井 一雅

高松市副市長

加藤 昭彦

七宝会会長

金子 知好

高松工業会会長

住田 博幸

香川県教育委員会教育次長

土岐 敦史

香川大学工学部長

中西 俊介

香川高等専門学校産業技術振興会会長

平田 喜一郎

株式会社香川銀行常務取締役

山田 径男

三豊市長

横山 忠始